動詞「似る」の意味用法について

―平安初・中期の仮名文を中心に―

森脇茂秀

一、はじめに

『枕草子』に次のような用例がある。（以下、傍線、波線は稿者）

また、わざととりたてて人めかすべくもあらぬさまなれど、かまつかの花らうたげなり。名もうたてあなる。雁の來る花とぞ文字には書きたる。かにひの花、色は濃からねど、藤の花といとよく（1）似て、春秋と咲くがをかしきなり。

萩、いと色ふかう、枝たをやかに咲きたるが、朝露にぬれてなよなよとひろごりふしたる、さ牡鹿のわきて立ち馴らすらんも、心ことなり。八重山吹。夕顔は、花のかたちも朝顔に（2）似て、いひつづけたるに、いとをかしかりぬべき花の姿に、實のありさまこそ、いとくちをしけれ。などさはた生ひ出でけん。ぬかづきなどいふもののやうにだにあれかし。されど、なほ夕顔といふ名ばかりはをかし。しもつけの花。葦の花。

これに薄を入れぬ、いみじうあやしと人いふめり。秋の野のおしなべたるをかしさは薄こそあれ。穂さきの蘇枋にいと濃きが、朝霧にぬれてうちなびきたるは、さばかりの物やはある。秋のはてぞ、いと見どころなき。色々にみだれ咲きたりし花の、かたちもなく散りたるに、冬の末まで、かしらのいとしろくおほどれたるも知らず、むかし思ひ出顔に、風になびきてかひろぎ立てる、人にこそいみじう（3）似たれ。よそふる心ありて、それをしもこそ、あはれと思ふべけれ。

（六七段　１０６頁）

ここで、問題となるのは、（1）である。通常、動詞「似る」の場合、（2）（3）のように上接する助辞は「に」で、「～に似る」形であるが、当該箇所においては、「似る」に上接する格助詞が「と」となっているのである。

この（1）は、「三巻本」本文で「と似る」形であるが、当該箇所の「能因本」本文では「に」となっており、直ちに「と似る」形の確定例として扱うことに注意を要すると考えられるが、（2）、（3）の「似る」に上接する助詞は「三巻本」「能因本」本文共に「に」であり、「ゆれ」は生じていないのである。

また、「似る」という動詞について、『時代別国語大辞典　上代編』では、「あるものがそれ以外のものと類似点を持つことをいう語で、比喩を表すために用いられる。その点でゴトシに近いといえる。」と指摘しており（注1）、所謂「比況」表現といった観点からの考察の必要性もまた存しているのではないか、と考えられる。

二、現代語における「似る」の用法

現代語における動詞「似る」について、「似る」は、「似て非なる」とか「似たり寄ったり」等の慣用句に出現する以外には、「似れば」、「似ろ」（「似よ」）形は稀で、大抵の場合は、「似ている」、或いは「似た」等の語形で出現する。換言すれば、現代語の動詞「似る」の場合には、使用される活用形は、殆どの場合「連用形」であるとも考えられよう（注2）。

但し、終止形、未然形は用例が検出できる。まず、「似る」という単独形、即ち「終止形」で使用された場合には、限定された用法であり、例えば、提示された文（「犬は飼い主に似る」等）の中である等といった、そこには「文語的」である、とか、「書き言葉的」である、といった、何らかの「文体論的要素」が想定される、と考えられる。

次に、否定形について、「似ている」「似た」に比べて数は少ないものの、用例が見られる。例えば、「似ない」形は、稿者自身は、使用しない語形であるが、インター

ネット上などでは検索でき、例えば、モデルとなったイラストと自身の描いたものが「似ない」とタイトル化している、等が散見されるのである。ただし、これらの中で、タイトルでは「似ない」であっても、実際の書き込みなどでは「似ていない」としているものもあり、これらの「似ない」は「主体の意図しているところからはずれている」ということを表しているようである。また、「似ず」形も用いられるが、これは「書き言葉的」である、といった「終止形」と同様の性質を有している、と考えられる。

そういった現代語の動詞「似る」について、『基礎日本語辞典』(注3)は、次のように指摘している。

・現在の状態「聳える、似る、すぐれる」等の状態を表す動詞に「ている」が付くと、現在の継続的な状態を表す。

(159頁)

・〔分析1〕「似る」でとらえられる対象は、人・物・事柄および事象など広く、ほとんど森羅万象すべてが「似る」の対象領域に含まれる。

・〔分析2〕「似る」でとらえる類似点は、具体的な形状・色彩・性質・・・・・・・等であるが、表現上は必ずしも、(略)細かく言わない。「似る」は、似る属性主同士で対比するのが自然な用法なのである。

・〔分析3〕「似る」は状態性を表す動詞なので「Bニ似ている」「Bニ似たA」の形で多く用いる。辞書形「Bニ似る」の使用例はそう多くない。(略)瞬間動作「じき似るでしょう」とか「すぐ似る」「昨日似た」のような言い方を持たない。状態変化としては「だんだん似てくる/似てきた」のように「〜てくる」によって表す。用法上、制約の多い状態動詞である。

(898〜899頁)

これらの指摘は、「似る」の意味用法について、大変示唆に富む、と思われる。

また、現代語の「似る」について、上接する格助詞と

の関係に着目した鈴木英夫氏の論考があり、それを示すと次のようになる(注4)。

・明治期以降の文学作品では「～に似る」が二七八例と、「～と似る」の三六例多圧倒的に引き離して多い。新聞資料（朝日新聞　平成一二年一二月分）では、一〇一例対六八例と差は縮まっている。これは、本来「似る」は二に下接するものであり、トに下接するようになったのは明治以降になってからであるためと思われる。「～と似る」が使われ出したのは、夏目漱石あたりからではないか。（略）一つの動詞が二ともトとも共起する場合、トが上接するようになるのは、多くは明治以降であって、翻訳の影響によることが多いように思う。

（46頁）

・「Aに似たB」と「Aと似たB」とでは、文学作品では前者が圧倒的に多いが、二の場合は、上接する名詞が日常的で、具体的なものが多い。身近なものを比較の基準に挙げて、Bの外見や状況、心理などを示す用法である。

Ⅰ　Aが具体的な種を、Bがより上位の集合を示す場合（赤鯛に似た魚）

Ⅱ　Bが、Aと外的な類似を示す場合（野武士に似た風貌）

Ⅲ　Bが、Aと内的な類似を示す場合（怨みに似た気持）

それに対して、「Aと似たB」では、Aは特殊な事柄を示すことが多い。（第一次大戦末期のドイツと似た状況）「Aに似たB」の場合は、AとBはごく自然な、客観的な類似を示しているのに対し、「Aと似たB」の場合は、両者を結びつけるのは、表現主体の主観が大きく関わってくる。その点、「から」と「ので」の違いに似ているといえよう。

（47頁）

1　ほとんどの用例は「Aに／と似たB」「BはAに／と似ている」という形式のものである。

2　打消表現には普通二が使われ、「Aに似ない（ず）」

となる。

3　「似たような」には、多くトが上接し、「Aと似たような」となる。

4　「Aと似たB」に読点が付けられる時には、読点はトの下に来て「Aと、似たB」となる。

5　語句が挿入される場合は、「Aと・・・・・・似たB」となる。

6　「Aに似たB」に読点が付けられる場合は、「Aに似た、B」となる。

7　「Aに」と「似た」の間に挿入されるのは「よく」ぐらいで、これはあまり多くはない。

8　不定称の下には、ニが下接する。

（51頁）

そして、「似る」に上接する場合について詳しく精査することより導き出された、助詞「に」「と」の用法について、次のように指摘しておられる。

・「似る」と共起する場合のニとトの違いは、ニが二つの事柄の客観的な類似を指摘するのに対し、トは表現主体の主観的な把握に基づく類似を提示すると言える。こうしたニとトの用法は、「似る」以外では「なる」にも見られ動作＝状態動詞場合のニとトの用法と言えよう。それに対して、動作動詞の場合は、ニとトは動作・作用の方向性に関わり、ニは一方的な、トは双方的な動作・作用を表す。

（51頁）

右の考察結果の中で「「～と似る」が使われ出したのは、夏目漱石あたりからではないか。」とのご推考は、既出「枕草子」（1）の用例とを考えた場合、現代語の意味用法の分析と共に、動詞「似る」の史的考察の必然性もまた存するように思われる。

したがって、本稿においては、現代語で「用法上、制約の多い状態動詞である」と指摘されている「似る」について、現代語の用法を考察した結果を踏まえつつ、史的観点から、今回は、平安初・中期の仮名文を中心にを対象に、その意味用法を考察してみたい、と思う。

三―一、「似る」用例数概観

上代・中古に於ける「似る」の各作品中の用例数を表にして示すと次のようになる（〈表Ⅰ〉）。

〈表Ⅰ〉「似る」用例表

作品名	成立年代	用例数	備考
万葉集	(759)	15	歌語否定語なし／左注には否定語あり
東大寺諷誦文稿	(830？)	0	
竹取物語	(859？)	3	「似ず」のみ
古今和歌集	(905)	2	仮名序に　1
延喜式祝詞	(905-927)	0	
伊勢物語	(900？)	4	全て否定語
土左日記	(935)	6	否定語　3
後撰和歌集	(951)	5	
大和物語	(956)	9	否定語　5
蜻蛉日記	(974)	8	否定語　5
三宝絵詞	(984)	5	否定語　2
落窪物語	(988)	9	否定語　7
枕草子	(1002)	21	否定語　7　似す　4
和泉式部日記	(1004)	0	
源氏物語	(1008)	132	否定語　89　似たり　42
紫式部日記	(1008)	4	
堤中納言物語	(1005)	6	似す　2
夜半の寝覚	(平安末期)	17	否定語　13
更級日記	(1060)	4	
大鏡	(1086)	3	
今昔物語集	(1106～40)	62	
法華百座聞書抄	(1110)	3	否定語「似ズ」3
古本説話集	(1126～	5	否定語　4
佛教説話集	1201)	2	
詞歌和歌集	(1140)	0	
梁塵秘抄	(1151)	2	
三教指帰注	(1169)	6	
宝物集	(院政後期)	1	似す　1
千載和歌集	(1178)	1	
宇治拾遺物語	(1188)	18	
方丈記	(1210頃)	4	
保元物語	(1212)	7	
平治物語	(1221)	7	
宝物集	(1221?)	2	否定語「似ズ」1
徒然草	(鎌倉初期)	17	
天正狂言本	(1330頃)	5	
大蔵虎明本狂言集	(1578?)	34	
計	(1642)	429	

以下、作品に即して「似る」を分析して行く。

三―二、「万葉集」中の「似る」

「万葉集」中では、和歌中に歌語として15例、題詞・左注に9例「似る」の用例が存し、萬葉仮名表記は全て「似」である。

まず、「歌語」としての「似る」は、

(1) めづらしとわが思ふ君は秋山の初黄葉（はつもみちば）に似てこそありけれ

右の一首は、長忌寸（ながのいみき）の娘（をとめ）のなり。

（巻八　1584）

(2) 冬十二月十二日に、歌ぶ所の諸王臣子等の、葛井連廣成の家に集ひて宴する歌二首

比來古ぶ盛に興りて、古歳漸く晩れぬ。理共に古情を盡して、同に古歌を唱ふべし。故に此の趣に擬へて、輙ち古曲二節を獻る。風流意氣の士、儻し此の集の中に在らば、爭ひて念を發し、心心に古體に和せよ。

わが屋戸（やど）の梅咲きたりと告げやらば來（こ）ちふに似たり散りぬともよし

（巻六　1011）

(3) 同じ石川女郎、さらに大伴田主中郎に贈る歌一首

わが聞きし耳によく似る葦（あし）のうれの足痛（あしひ）くわが背勤めたぶべし

右、中郎の足の疾（やまひ）に依りて、この歌を贈りて問訊（とぶら）ふそ。

（巻二　128）

(4) 君に似る草と見しよりわが標（し）めし野山の淺茅人な刈りそね

（巻七　1347）

(1)、(2) は「似る」の連用形で、(1) は「に似てあ

り」形、(2)は「に似たり」形となっている。(3)、(4)は連体形で、共に「Aに似るB」形であるが、(3)は、「に」と「似る」との間に「よく」があり、これは「Aに」と「似た」の間に挿入されるのは「よく」ぐらいで、これはあまり多くはない。」とする、現代語「似る」の用法と同質である、と考えられる。

また、「万葉集」中の「似る」は、歌語として用いられた場合、否定語と共起した例は見られないということも、大きな特徴である。「似る」は、後世、否定語と直接共起した用例が数多く存するのである。その中で、(5)、(6)のように、助詞「か」と共起した例が存している。

(5) あな醜(みにく)賢(さか)しらをすと酒飲まぬ人をよく見れば猿にかも似る

(巻三　344)

(6) 攀(よ)ぢ折れる保寶葉(ほほがしは)を見る歌二首

わが背子(せこ)が捧げて持てるほほがしはあたかも似るか青き蓋(きぬがさ)

講師僧惠行のなり。

(巻十九　4204)

助詞「か」は、「未定」という点で、「否定」と共通性があるとも考えられよう。また、これらのように、歌語としては「万葉集」において、否定語と直接共起した例はないのであるが、題詞・左注には、(7)に示すように、

(7) へそがたの林のさきの狭野榛(さのはり)の衣に着くなす目につくわが背

[左注]右一首歌今案不似和歌　但舊本載于此次

(右一首の歌は、今案(かむが)ふるに、和(こた)ふる歌に似ず。ただし、舊本この次(つぎて)に載す。)

(巻一　19)

とあり、否定語「ず」と共起した例を見出すことが出来るのである。「題詞・左注」といった、漢文体に出現した「似」には、否定語と共起している用法が存している

という点は、動詞「似る」の語性を考える上で重要であると考えられる。

三―三、「古今和歌集」中の「似る」

「古今和歌集」には2例、また「仮名序」に1例「似る」の用例が存する。

（1）うつせみの世にもにたるか　花ざくら　さくとみしまにかつちりにけり

（巻二　春歌下　73）

（2）　よみ人しらず

月夜よしよよしと人につげやらばこてふにににたり　またずしもあらず

（巻十四　恋歌四　692）

（3）をののこまちは、いにしへのそとほりひめの流なり。あはれなるやうにて、つよからず。いはば、よきをうなの、なやめるところあるにににたり。つよからぬは、をうなのうたなればなるべし。

（「仮名序」　101頁）

「古今和歌集」中の「似る」は、（1）、（2）、（3）共に「似たり」と助動詞「たり」が承接した語形であり、また上接する助詞は「に（も）」で「に（も）似たり」形である。この点、「古今和歌集」中の「似る」は、統一した用法である、と捉えることができる。

また、「似る」の対象は、（1）「うつせみの世」、（2）は、前述「万葉集」（2）と関連しており（注5）、『大系』頭注に「こてふににたり」「いらっしゃいというようだ」とあるように、「こ（てふ）」、（3）は「（なやめるところ）ある」であり、やや抽象化した概念として捉えるものが、対象となっている。また、（1）は、疑問助辞「か」が後接しており、『万葉集』中の用法と同一であるが、直截的に否定語と共起した例は存していない、ということも指摘しておきたい。

三―四、「竹取物語」、「伊勢物語」中の「似る」

「竹取物語」中の「似る」は3例であるが、「万葉集」「古今和歌集」と明らかに相違し、「似ず」という語形のみで、否定語と共に用いられている点、これまでの用法とは異なる。これは、漢文訓読語「シク」が、「主として上代の資料や漢文訓読資料に認められる。訓読資料では「しかず」「しかむや」などの形が多い。」(注6)等と指摘されることとの類似性を想定できるのではないか。

(1) さて、かぐや姫、かたちの、世に似ずめでたきことを、御門きこしめして、内侍なかとみのふさこにのたまふ、「多くの人の身をいたづらになしてあはざなるかぐや姫は、いかばかりの女ぞと、まかりて見てまゐれ」との給ふ。

(「竹取物語」御門の求婚　53頁)

(2) (略) 翁答へていはく、「天下の事は、とありとも、かゝりとも、み命の危さこそ、大きなる障りなれば、猶仕うまつるまじき事を、まゐりて申さん」とて、まゐりて申すやう、「仰の事をかしこさに、かの童を、まゐらせむとて仕うまつれば、宮仕へに出し立てば死ぬべし、と申す。宮つこまろが手に生ませたる子にもあらず。昔、山にて見つけたる。かゝれば、心ばせも世の人に似ず侍(り)」と奏せさす。

(「竹取物語」56頁)

(3) 立てる人どもは、装束の清らなること、物にも似ず。飛車一つ具したり。

(「竹取物語」63頁)

また「竹取物語」では「似る」は、これまで同様、「・・・に(も)似る」形をとり、その対象は、(1)「かたち」が「よ」に(2)「心ばせ」が「よのひと」に(3)「装束の清らなること」が「もの」に、であり、「似ず」は「類のない」ということ、即ち「比況」表現と同質の用法となっている、と考えられる。

また、「伊勢物語」中の「似る」について。

(4) むかし、紀の有常といふ人有りけり。み世の帝につかうまつりて、時にあひけれど、後は世かはり時うつりにければ、世の常の人のごともあらず。人がらは、心うつくしくあてはかなることを好みて、こと人にも似ず。貧しく經ても、猶むかしよかりし時の心ながら、世の常のことも知らず。

(「伊勢物語」十六段)

(5) むかし、東の五條に大后の宮おはしましける、西の對に住む人有りけり。それを本意にはあらで心ざしふかゝりける人、行きとぶらひけるを、む月の十日ばかりのほどに、ほかにかくれにけり。ありどころは聞けど、人の行き通ふべき所にもあらざりければ、猶憂しと思ひつゝなんありける。又の年のむ月に、むめの花ざかりに、去年を戀ひて行きて、立ちて見、ゐて見れど、去年に似るべくもあらず。うち泣きて、あばらなる板敷に月のかたぶくまでふせりて、去年を思ひいでてよめる。

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして

とよみて、夜のほの〴〵と明くるに、泣く〳〵歸りにけり。

(「伊勢物語」四段)

(4) は「も」が先行し、「・・・にも似ず」、(5) は、助動詞「べし」と承接し、「終止形」の「似る」であるが、後接に否定語「あらず」があり、それに先行する形で「も」が介在している。ここでは「に似るべくもあらず」と一括して捉え、否定語と共起した用法であると考えてよいのではないか、と考えられる。

(6) 陸奥の國にいきたりけるに、あやしくおもしろき所〳〵多かりけり。わがみかど六十餘國の中に、鹽竈(しほがま)といふ所に似たるところ無かりけり。されば なむ、かの翁さらにこゝをめでて、鹽竈にいつか來にけむとよめりける。

(「伊勢物語」八十一段)

(7) むかし、春宮の女御の御方の花の賀に、召しあづ

けられたりけるに、

花にあかぬ歎きはいつもせしかども今日のこよひに似る時はなし

（「伊勢物語」二十九段）

（6）は、助動詞「たり」が承接した「似たり」形であり、「似る」を直接否定する（4）「似ず」とは異なっているが、後接部に「なかり」が存し、述部に否定語を伴う、ということから、（5）の形式とは用法を異にするが、後接部に「否定語」を伴った「打消表現」の一用法と捉えることができる。そうすると（7）も「似る・・・なし」と述部に否定語を伴う形式として考えられ、「伊勢物語」中においては、「似る」は否定語と共起する用法に限定されており、その否定する語は「似る」に直接承接するもの、後接部に承接するもの、というバリエーションがあると考えることができるように思われる。

三―五、「土左日記」中の「似る」

「土左日記」中には、「似る」の用例が6例存する。

（1）いとおもひのほかなる人のいへれば、ひとぐあやしがる。これがなかに、ここちなやむ船君、いたくめでて、「ふなゑひしたうべりしみかほには、にずもあるかな。」といひける。

（二月六日　53頁）

（2）からくいそぎて、和泉の灘といふところにいたりぬ。けふ、うみになみにA似たるものなし。かみほとけのめぐみかうぶれるにB似たり。

（一月三十日　47頁）

（1）は打消の助動詞「ず」と承接し、（2）はA、B共に、助動詞「たり」と承接しているが、（2A）は、「似たる・・・なし」で述部に否定語を伴う形式であるのに対し、（2B）は、「に似たり」と肯定形であることが明らかに相違する。

（3）廿九日。大湊にとまれり。くすしふりはへて、屠蘇、白散、さけくはへてもてきたり。こゝろざしあるに似たり。

（十二月廿九日　31頁）

（3）は、助動詞「たり」と承接した「似たり」形であり、（2B）と同質のものであるが、当該箇所の『日本古典文学大系』「頭注」に「厚意があるように思われる。「似たり」は仮名文学中ではこの日記だけに見える訓点語。」とあり、『新日本古典文学大系』「脚注」にも「漢文訓読語。断言しない点に皮肉の気持か。」との指摘がある。

『日本古典文学大系』の「この日記だけに見える訓点語」という指摘は、「土左日記」に限って表れる訳ではないことは、明らかであるが、「に似たり」形が漢文訓読に用いられる、ということは確かである。

築島裕氏は、『平安時代の漢文訓読語につきての研究』中、「土左日記と漢文訓読」(注7)で、「～に似たり」を漢文訓読語と指摘し、「～に似たり」と同じ意味に当たる語として「やうなり」を挙げておられることも、「に似たり」形が用いられると「漢文訓読語」である、という指摘に結びついていったのであろう、と考えられる。現代語の「～と似る」が明治期の「翻訳の影響」化での成立であるならば、「似る」という動詞は、平安時代に、「～に似たり」と漢文訓読の影響を受け、時代が下り、また、新たに明治期に格助詞の交替という翻訳の影響を受けた、ということになる。

（4）ここにひとぐのいはく、「これ、むかしなだかくきこえたるところなり。故惟喬親王のおほんともに、故在原業平の中將の、「よのなかにたえてさくらのさかざらばはるのこゝろはのどけからまし。」といふうたよめるところなりけり。」いま、けふあるひと、ところに似たるうたよめり。

ちよへたるまつにはあれどいにしへのこゑの寒さはかはらざりけり

（二月九日　55頁）

(4) も助動詞「たり」と承接し、「場所がらにふさわしい歌を詠んだ」と解釈できる「に似たり」形であるが、「に似たり。」と文が終止せずに、連体修飾語として「Aに似たるB」と、既に現代語「Aに似たB」と同型となっている。

(5) (略) かへるさきのかみのよめりける、
しろたへのなみぢをとほくゆきかひてわれにに似べきはたれならなくに
(十二月廿六日　29頁)

(5) は『新日本古典文学大系』「脚注」に「誰でもない、あなたなのに。新任者への同情とも皮肉ともとれるように詠んだ。」と指摘されている。断言しないことに「皮肉」の意味を読み取れば、(3) と同質の用法となろう。

ここでは、これまでの「ず」や「なし」等、直截的な否定語を伴った用法ではないが、後接部に「なくに」があり、上の事柄を打ち消し、下に逆接的に続けるもので、文意からすれば、広義に〈否定的要素〉を含んだものである、とし、「伊勢物語」中の用例と同様に捉えることができるのではないか、と思われる。

三―六、「枕草子」中の「似る」

「枕草子」三巻本系本文によると、「似る」の用例は21例見られ、未然形が5例、連用形が13例（内「似て」6例）、「似たり」7例）、終止形（「似るべし」の形で）2例、連体形が1例である。

(1) のぼる送りなどに、なやましといひていかぬ人をも、のたまはせしかば、あるかぎりつれだちて、ことにも似ず、あまりこそうるさげなめれ。
(九十段　141頁)

(2) 「かくものを思ひ知りていふが、なほ人には似ずおぼゆる。「思ひぐまなく、あしうしたり」など、例の女のやうにやいはむとこそ思ひつれ」などいひて、わらひ給ふ。
(一三六段　190頁)

(1)、(2)は「に似ず」形で、(1)は、「ほかの舞姫のときとちがって、あまりにもおおげさであったようだ」、(2)は「そう万事を理解していうのが、やはり他の人とはちがっていると思われる」と解釈される用例である。また、(2)は会話文中に「似ず」が用いられており、文章語専用ではなかった傍証ともなるであろう。

このような否定語と共起した打消表現に用いられる「似る」は、中古仮名文で広く用いられ、他の類義語、例えば「ゴトシ」との比較においては、明らかな相違点として捉えられる用法である、と考えられる(注8)。

(3)されど、なり給ひにしかば、まことにさうざうしかりしに、源中将おとらず思ひて、ゆゑだち遊びありくに、宰相の中将の御うへをいひいでて、「「未だ三十の期に及ばず」といふ詩を、さらにこと人にa似ず、誦じ給ひし」などいへば、「などてかそれにおとらん。まさりてこそせめ」とてよむに、「さらにb似るべくだにあらず」といへば、「わびしのことや。いかであれがやうに誦ぜん」とのたまふを、「三十の期」といふ所なん、すべていみじう愛敬(あいぎやう)づきたりし」などいへば、ねたがりてわらひありくに、陣につき給へりけるを、わきによび出でて、「かうなむいふ。なほそこもと教へ給へ」とのたまひければ、わらひて教へけるも知らぬに、局のもとにきていみじうよく似せてよむに、あやしくて、「こは誰そ」と問へば、笑みたる聲になりて、「いみじきことを聞えん。かうかう、昨日陣につきたりしに、問ひ聞きたるに、まづc似たるなり。「たれぞ」とにくからぬけしきにて問ひ給ふは」といふも、わざとならひ給ひけむがをかしければ、これだに誦ずれば出でてものなどいふを、「宰相の中将の徳を見ること。その方に向ひてをがむべし」などいふ。下にありながら、「上に」などいはするに、これをうち出づれば、「まことはあり」などいふ。御前にも、かくなど申せば、わらはせ給ふ。

(一六一段　218～219頁)

(3a)は「に似ず」形で、(1)、(2)と同質の用法であるが、(3b)も後接部に「あらず」とあり、否定語と共起した「打消表現」と考えられる。

（4）くれなゐの御衣どもよろしからんやは。中に唐綾の柳の御衣、葡萄染（えびぞめ）の五重がさねの織物に赤色の唐の御衣、地摺の唐の薄物に、象眼（ざうがん）重ねたる御裳などたてまつりて、ものの色などは、さらになべてのに似るべきやうもなし。

（二七八段　２９６頁）

（5）かへらせ給ふ御輿のさきに、獅子・狛犬など舞ひ、あはれさる事のあらん、ほととぎすうち鳴き、ころのほどさへ似るものなかりけんかし。

（二二一段　２５３頁）

（4）は「衣の色などは全然一般のものに似ていようはずもない」と解釈できる。「能因本」本文は「ものの色、さらになべて似るべきやうなし」とあり、「も」の有無が存しているが、ここでは、「似る」に対応する箇所に「やう」が用いられており、注目される。

（5）は、三巻本と対応する箇所が能因本には存しないが、（4）と同様、後接部に否定語「なし（なかり）」があり、（3b）と同用法と考えられる。

漢文訓読語と指摘されている「に似たり」形は、（3c）のように、通常の肯定文も存するが、「に」と「似たり」との間に「係助詞」が介在する例が見られる。

（6）ほほ・ぬりぼねなど、骨はかはれど、ただあかき紙を、おしなべてうちつかひもたまへるは、撫子（なでしこ）のいみじう咲きたるにぞいとよく似たる。

（三五段　７８頁）

（7）（略）上の、「このわたりに見えし色紙にこそいとよく似たれ」とうちほほ笑ませ給ひて、いま一つ御厨子のもとなりけるをとりて、さし賜はせたれば、（略）

（一三八段　１９４頁）

（8）わが乗りたるは、きよげに造り、妻戸あけ、格子あげなどして、さ水とひとしう下りげになどあらねば、ただ家の小さきにてあり。

小舟を見やるこそいみじけれ。遠きはまことに笹の葉を作りてうち散らしたるにこそいとよう似たれ。とまりたる所にて、船ごとにともしたる火は、またいとをかしう見ゆ。

（三〇六段　３１６頁）

（9）僧都・僧正になりぬれば、佛のあらはれ給へるやうに、おぢまどひかしこまるさまは、なににか似たる。

（一八六段　２３６頁）

（6）は「ぞ」で「紙が撫子が美しく咲いているのにたいへんよく似ている」、（7）は「こそ」で「主上が「この辺にあった色紙にそっくりだな」と微笑なされて」と解釈できる。（6）、（7）は対象が「紙」で共通し、「に」と「似たり」との間には、現代語の連体修飾「Aに／と似たB」で指摘された「（いと）よく」がある。（8）は、「こそ」で「舟が笹の葉を散らしたのにそっくりだ」と解釈できるが、（6）、（7）同様「いとよく」が介在しており、「似たり」が用いられた場面も「漢文」乃至は「漢文訓読」的である、という必然性は、想定しにくい。

（9）の、「に」と「似たり」との間に介在する係助詞は「か」であるが、「僧都・僧正」「佛」とあり、ここでは「仏教」的環境が想定できるが、現代語「似る」の用法で「不定称の下には、ニが下接する。」と指摘されているように、ここでも「なにに」となっている点、同質の用法であり、他の係助詞介在と同列に扱ってよいのではないか、と考える。

（10）桧の木、またけぢかからぬものなれど、三葉四葉の殿づくりもをかし。五月に雨の聲をまなぶらんもあはれなり。

かへでの木のささやかなるに、もえいでたる葉末のあかみて、おなじかたにひろごりたる、葉のさま、花も、いと物はかなげに、虫などのかれたるに似てをかし。

（四〇段　８８頁）

（10）の三巻本と対応する能因本本文は、「虫などの乾れたるやうにてをかし。」となっており、（4）同様「似る」と和文語「やうなり」との近似の性質を有していることが窺える。

四、おわりに

以上、平安時代初・中期の仮名文に見られる「似る」の用法を考察した。その結果、「似る」は、否定語と共に用いられる用法が多数であり、この点では、「ゴトシ」というよりも、漢文訓読語「シク」（「シカズ」等）に近似の性質を有する、と考えられるのではないかと思われる。

・いと若うをかしげなる声の、なべての人とは聞こえぬ、（女）「朧月夜に似るものぞなき」と、うち誦じて、こなたざまには来るものか。いとうれしくて、ふと袖をとらへたまふ。

（「源氏物語」花宴（一）　426頁）

この用例について、小学館『日本古典文学全集』「頭注」に「照りもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜にしくものぞなき」（大江千里集、新古今・春上　大江千里）による。「しく」は漢文訓読語なので、女にふさわしく「似る」と言いかえたとも、当時すでに「似る」と伝承されていたともいわれる。この歌によって、この女を朧月夜と称する。」と指摘する記述があるが、「似る」の語性を考えたときに、重要な指摘である。

また、「に似たり」形は、「漢文訓読語」である、との指摘があるが、「に」と「似たり」との間に、「ぞ」「こそ」等の係助詞が介在したり、「いとよく」等の修飾語が介在しており、漢文訓読にみられた「形式用言」としての「に似たり」形ではなく、仮名文に用いられた「に似たり」形は、状態性を有した「実質動詞」であると考えられる。

他の作品、例えば「源氏物語」の「似る」の意味用法、また中世以降の変遷過程、「シク」や「ゴトシ」、「やうなり」等の、所謂類義語との関係、更には「すぐる」等、現代語で「ている」と共に用いられる動詞群との関係、等々については、稿を改めて論じたいと思う。

ご教授賜れば幸いである。

（尚、本文は、「源氏物語」は小学館『日本古典文学全集』、その他は、岩波書店『日本古典文学大系』に依った。また、私意に句読点等を改めた箇所がある。用例検索にあたっては、各種『索引』を利用させて頂いた。）

【注】

（注1）三省堂　昭和42〈1967〉。

（注2）インターネット上では、用例があり、例えばYahoo検索（2004／12現在）では「似れば」約1800件、「似ろ」約80件、である。因みに「似ない」約二万件、「似ず」一万三千件、でほぼ拮抗し、「似る」は約九万件、「似ている」二百万件であり、「似れば」「似ろ」とは、明らかに違いがある。

（注3）森田良行　角川書店　平成元〈1989〉。同書で指摘されている、この種の動詞は、例えば、「そびゆ」の場合、「源氏物語」に一例、「紫式部日記」に一例、と用例数は、少ないが、「すぐる」の場合、「源氏物語」には一二五例見られ、中古から用例が存することが解る。

（注4）（「特集　日本語教育と日本語文法　格助詞と動詞　――「～に似る」と「～と似る」を中心に――」『日本語学』20―3　〈2001／03〉。

（注5）例えば、『萬葉集　二』（新日本古典文学大系）（佐竹昭広他校注　岩波書店　〈2000〉69頁脚注参照。

（注6）小学館『古語大辞典』中田祝夫他編　小学館〈1989〉。

（注7）第六章第三節参照。東京大学出版会　昭和38〈1963〉。

（注8）例えば、「源氏物語」では、「似る」一三二例中、八九例が「打消表現」の用法である。